



ねえ、さみゆ

やまゆり

ねえ、さみゆ

きょうもわたしは、ステージに立つ。
スポットライトがあたる、
そしてわたしは歌い出す。

きょうもあなたをひとり占め
夢の中でもひとり占め
それなのに彼 わたしのこと
見てくれないの もう 我慢できない！
すき すき すきなだけよ
それだけなのに 全然 伝わらない！
でも
むきになって かわいいね
その一言で わたしは全て なんでもよくなる
あなたのことが すきだから

歌い終え、にっこり笑った。
お客さんは、30人てところだろうか。
そしてみんなわたしをこう呼ぶ。

「さみゆー！！」

「さみゆー！！最高だー！！」

わたしは、いわゆる地下アイドルで、
さみゆえる・ろーずという芸名でひっそり活動している。
もちろん、アイドルだけで生活はしていけないので、
喫茶店でアルバイトもしている。

きょうは、大切な日だった。
この公演が終わったあと、バイト先で知り合った男の子と、
デートがあるのだ。
彼はわたしがさみゆとは知らない。
そして口が裂けても、このことを言わない。
だってさみゆは、わたしのいつわりなんだ。

握手会を終えて、

さみゆは、さゆりになった。

「みんな、ありがとう」

そう言って、足早に、ライブハウスを出た。

夜の6時、さゆりは待ち合わせ場所に向かう。

すっきりと晴れていて、空気が冷たくて、

高鳴る鼓動も心地よかった。

高倉くんは、もう待っていた。少し背が低いけど、

彼のしゃべり方は、いつもわたしを安心させる。

「ごめんなさい、遅れちゃって」

「いやいや、いいんだよ、行こうか」

冬の街を二人並んで歩く。

わたしはるんるんしてきて、

「寒いですねー！」

と、意味もなく、少し大声で言ってみた。

二人で会うのは初めてだった。

高倉くんはわたしのバイト先の喫茶店の常連さんなのだ。

少しずつ、仲良くなって、

一か月前に、アドレスを交換した。

メールのやりとりで、わたしは早くも高倉くんがすきになった。

まわりに男の人がいないのもあるし、

今までの男運のなさには泣けてくるし、

とにかく相性が合うんだって、思って、

もうこれは思いこんでるんだろうなって自分でも感じたけど、

それだけ、さみしかったんだ。

すごく好き。

高倉くんにはわたしの全てを委ねてもいい。

高倉くんが望むなら、さみゆを捨ててもいい。

レストランで二人はパスタとピザを食べた。

それはもうおいしくて。

たくさん笑って、わたしはしあわせだった。

バイトに行って、夜はライブをして、

疲れ果てて、ベッドにダイブの毎日。

たまにはこういうことがあったっていいよね。

「ところでさ」

「ん？」

「さゆりちゃんってアイドルなんでしょう？」

「え」

知っていたのか。

不意にこころに暗雲が立ち込めた。

そしてわたしは次に、

なんていえばいいのか分からなかった。

だから、こう言った。

「高倉くんがいやなら、アイドルなんて辞めてもいいよ」

渾身の一言に高倉くんはふっと笑った。

「辞めないで、大丈夫だよ」

わたしはホッとした。が、次の瞬間

「アイドルと付き合うかもしれないなんて、

なんか、おもしろいし」

ん？なんだこの展開。

目の前が少し揺らいだ。

「オタクとか、気持ち悪くない？ちょうたいへんだね。

それにさ、誰とでも寝て、仕事するんでしょ？」

「そんなわけない！なに言ってるの高倉くん」

「いや、ほんとのこと言ってよ。友だちに自慢するから」

「なんにもしてないよ！！」

「なに、突然大きな声出して」

「うるさい！！」

わたしは立ち上がっていた。

「高倉くんは、高倉くんだけは、わたしを見てくれてるって思ったた。

でも結局、アイドルのわたしを見て、おもしろがっていたんだね。

結局、わたしのことなんて」

「怒っちゃった？僕はさゆりちゃんがアイドルですごいなって思っただけで」

「帰る。さよなら」

どれくらい歩いただろう。

それでも涙が止まらなかった。

わたしは、結局だれにも見てもらえないんだ。
さみゆなんて、もう、やめちゃおうかな。
夢追いかけても、しあわせは逃げていくばかりだ。
好きってなんだろう。愛って、どうやって、
育めるのだろう。恋ってどうやって、落ちることができるのだろう。

わたしはスポットライトの下で歌う。
泣き過ぎて目が腫れたけど、
アイシャドウとマスカラを重ねづけしてカモフラージュした。
きのうの夜寒くて、風邪をひいたのか少し声が出ない。
でも、わたしは、やらなくちゃ。

「こんばんわ！さみゆです」

「さみゆー！！」

「いえー！！」

「きょうも、歌っていいですかー？」

「待ってましたー！！」

「ありがとう！じゃあいくよ！」

握手会で、思わぬことが起こった。
ファンみんなが、わたしの異変に気付いたのだ。

「きょうは、声が少し出ずらそうだったので、心配です」
「ちょっと元気がないように見えました、大丈夫ですか？」

ああ、みんな、ちゃんとわたしを見てくれてるんだ。
高倉くんなんかよりも、ずっとずっと、純粹に、真剣に、
わたしを、思ってくれている。
さみゆとわたしは、名前が違う。でも違うのは、それだけなんだ。
わたしはひとりじゃない、思ってくれるひとがいる。
涙がこぼれそうになったから、笑った。

「ありがとうございます！」

「よかったです！ねえ、さみゆ、...」

気付けば12月だった。

もうすぐ雪が降るのだろう。

夜に降る雪が、わたしはだいすきだ。

闇の中にも、輝いている結晶は、自分を彷彿とさせ、

そしてそれはとても美しいと、思えるのだった。